蕉門
俳諧
所説録
直旨傳
乾坤

中村俊定文庫
文庫 18
898

文久二壬戌新雕

花御本鳳朗著

蕉門俳諧師説録 全二冊

直旨傳合套

東都書房　一貫堂梓

端書作者の名なく時日も
なけれは其の文意を考え
まするに祖翁の生前に得
たる趣ニ聞へたり按ずるに翁
生前ニハとても此表題ハあるまじ
又遷化の時の首途の詠ニ此
書深川へ残りたらんニハ名を
さゞれなの杉風及桃隣其角
嵐雪らともがらの外ニある
なれは思ふニ此序越人
みつから書るかさらハ遷化
の時の末期の首途ニかく
道の秘事などあらざる記
事なれハ菊生右の書なと
一变ニあつかるを得るなる事
く一々先ニおのこしもと
まては陀をものしなからんを
ハ名古屋へ持おもむしか又ハ
越人ニあつけられしかなる
屋し深川へ残てあらんニハ

直旨傳師説録の二書ハ本一書ニして誰か蔵
せしといふ事もなく誰か志ちて集めしといふ
ことも侍らハ芭蕉庵の日杖席毎の記事の様を
ありのまゝを書記しけむ拾ひて書きしといへるも
あれハ席上ニ而聞き出したる事ともを書つゞくの記
事なれハ其事ニよりて誰もかれもと言論
録をうつしたるものハ書写の際ニて紛れ出ると
ハなりて原本ハ先師の筆語あらそ論しさたさ
私しをはしめとし門人らのうつし於れのく問
書きひく物語をる余し又先ハみつからも

いつれの手筋へか来りて傳
たるへきか今沙汰なきこそ
旅寝論に抜されし證なるへし
されハケ条の次第まとはか
かくて十九ちて申れて越人
接合ありて表説もかくいふ
むしろきりのたゝんまゝハ
序も亦越人のかけるふれ
遠おかし
但時代を考ふるに越人
在禄につきて此集を記し
ハ翁遷化のあとゝ後なり
又越人ハ翁勧学の門人
なりし許六か書るも々
支考か説を真事とき
誤なりかくさはかなき者説
なり野水荷兮の両士か
説も支考かいつはりの説
なるへし

しかされしおくまでをとりちて直旨傳らし
門人互ニ論し出て師の正見をうけ可否を志
めし或ハ論ありてきるつかれし物ホを寄き忽
らして師説録と云又師説録の中ニも問の外ニ
見紀示されし数々師もかくやされしなとおの／＼
むたくに志ろきまゝ之を紀も違ふされたるい
志て取うけ堂るといふきハもなくあれひくに
うけ始しか一地して大ふるに分れてのく二名
二本とハなれるなりあるしも蔵まもなく門人
なりの熱腸とおいまんまゝ漏も予か手ふとく

漏り出たるハ天の書漏りの之と常くまされもれ
しらす又さらふ漏も師のかくしとまて思ふらし
今となりぬるそ口惜しき

此書元来記事なれども多く俳諧の発端なし席にのぞむのよりて起る不の坐籍をきる時始めとて古今よりの出所且連歌の起る次第を繹ふあるし補ひて按ずるに翁のたゞしき語ちなき今の出所にのそきれば是を引てよるべし又此書の表名はそむけり仍てこれを削て翁の旧式の書に遵ふ此古池の句は翁の俳意の冠を一句にしめすの大事なれば自筆にて若干ある一軸ある禅室の秘宝とするをひそかにうつしむえへりみずして右删する補支ふかへてのせ補ふなり翁俳意を此一句にて

正風俳諧直旨傳

夫天地は「不易流行 無∧有」風雅也「則大道之 翁俳諧」萬象も「有心」亦風雅也此風雅は佛「大無を指ス」祖の解脱にして四時に従て移り行ものなり四山野「心月」月にあそびとりふするに観ずる命「心花」花にあそびとりふするなし「常光」心月にあそばれも夷狄に類し「和幻」容「有花帰無」花にあそばれも禽獣にひとし夷狄を出て禽獣をはなるゝ是容「玄微」造化にかへれとなり

古池や蛙飛こむ水の音

野石那須雲岩寺佛頂和尚使六祖五左エ門問桃青曰如何是祖師西来意答曰蛙飛コム水ノ音也ト是ニ五文字を冠て本句とせり 右鎌倉圓覚寺成拙和尚

中村俊定文庫

無意を出て志なし
に任す其有意則無意是
蕉門之奥意也句〻依之
古説
昔蒸の中に於て神代の
八雲の和歌をもし先代に
和歌の姿を調ての風体
をとらしてより此俳諧の
名は定れりこれと俳諧
は余の歌と替りて滑稽
の姿をあらわし表て諸
国の人を含める句法なり
玄旨法印の〻時に俳句を
上段の歴とふ如く綴る
ことは貞徳の説に因て是
金云ての意は歴之意
を表に浮るを是とし
実を意につくるを排とは
是宗因の説なり実を実
にいひ歴を意に寓す事な

傳尚同二代清蔭和尚答問

○俳の字の事

翁曰字義の論にかゝはらず只ありのまゝに名にてよきなり他門に於して論を入て諸を退き捨置を用ゆる人唯蕉門に於ふ人なり

○俳諧式之事

翁曰俳諧の式は連歌の式に倣て先達の沙汰しるるる連歌に新式あり追加あり二条摂政良基公の御作之今按は一條禅閣の御作なり此三ツを一部と志ゆる肖柏の作之連歌に

俳諧の道はまことにこと之
説はいちく中古ゆる中
に誤りて誹諧の字を編
出すを人皆好事と覚え
りあられども
勅定をもて称るし書き
これを見を古実の例と志
く昔は誹の字の用ひし
ゆゑ又一説誹之字再板
の誤之上云く
洛東清水地主の法楽は
本式連歌あり毎月十八日
奥行時の宗匠出座本式
十句表之裏白の連歌く
いふも正月四日北野管番
まてある式之是は元執筆
の誤より起るといふ
いふし表を表に書て裏
を別帋のうへに書なり
根元は執筆を丁の

四ツとある物を俳諧にも五ツとし七句を五句去とし俳諧ありても蕉門安くと沙汰し其外ありて按ずるに追加に漢和の式あり大概是を俳諧の式法とし昔より定るなり貞徳の俳傘なか無中あし是等の式の中に信用すべきものを俳余言といへるなり大中にも宜しき拵の式もなくては調かなし自つまも書あれかしといへへるもあれと慎つきなとありし法式を定置いふるゝ家重き事ともされども葉の本と稱き継きて人々法度にしてある名の論なし代て

かへしあやまりか
歌囊をうへして表をなた
るふより二丁の間ゝ白紙
出来よら之を咁の宗匠是
を戒ノそくりあくす裏白
の連歌と號して式と
なくなふ

翁曰俳諧ハ風雅の短刀
之太刀長刀の長きも九
寸五分の匕首も一刀ゟて
人をあとむる理ハひとつ
なり俳諧の起ら奴世ゝも
あんへなまりて入丸赤人
をもしめ貫之業平公任
定家家隆是を俳諧の大
先達之遍照能因寂蓮
慈圓西行ハ此日域ゝ二人

ふ連歌を短あるゝあれとも世人是を守らさるハ何事なや私ふ法を作りて是を守れとなり恥へき事之指合の事ゟ咁ふ至るまよらへし先ゟ大方ま志らく絡し記ありて若志ある輩ハ此趣を表起てひそふ自心の大法となるべしさとも恐かも

○變風の俳諧の辯

翁曰世ふ俳諧といふ事行ハれて代て利口のことふ糖狂する族ゝ世ゝ行ハれもといへともろまて古人の洞察を以てかしこ記ふ入らんや予此道ゝ狂ふこと三十年行めて意実

となれ俳諧の大道心小
町伊勢紫清少納言弁
華ろもまき俳諧の智婦
人之ある吟詠なりところ
余悩目ゝハ和歌と見ゆ在
りれと諷詠なれてされらへ
おとしもおろかや祖神とあふ
きまつる菅神の鶯の人まり
ひらのからられたる山の端
迯ての吟西行の月やら
うの花を抑へたする百人一首
の眼ゝハよくてまれらへなり
文章まてハ罪なくして配所
の月或ハ月ゟ隈なきをの
こ思ふものゝハ千外此比の挙
白集かすくの文章ゝる俳
諧の見つけ所之それを言
棄ふらく十七字ゝいひ
述たと俳諧の短刀なり
讃徳公和歌所の別ゝ宗匠

を得より名ゟ古人の俳諧を假るといへとも
ちゝ絡ゟ往古のちからふあらされハ俳諧
乃名ゟ傳りて其意を用ひ寸代でむなしく押
移る事ゟいふまでやまさをもて予常まいふ
俳諧ハ古人なしと云なり古人の跡を謙て
寛メさらぬ復變風の理を識なし功もふ不
の境ま此復何人か出て是を撹む事唯復出を
思ふまくなり昔より詩歌ゝ名ある人多しといへ
ども実より入て実を出るのことく花ゟ実なれ
そのよう実を求んと出ふ人虚実の間ゝ狂ふ

撰ハる時に源順其文を作る其文中曰雄劒在腰抜則秋霜三尺雌黄自口吟又寒玉一声也と云り此文の雄劒に對する短刀なるなるお疑ふ事
但此文順か名文なりとかや
発句ハ大悟の立つ所脇ハ大悟の収る所故に脇を少しも跡へ心の残る様なき中しいひきるといへる次へさらふんあるハ脇手あらは平句之翁一大事の秘密之由ぬしヽ口外せんら是翁の道の規矩準縄のひとつなり
翁曰脇の手爾葉留ハ万葉を盗鶴と見るこれかかしハ鴨之接之ハとまらん紫と

志ゝも虚実にかヽはらぬ家の秘事なり

○脇の句法

翁曰脇の留を韻字といふハ真名文字にて留る故也聯句の脇句に對之此格に倣ふて韻字留と云ふ脇体の事五体之体なし姉小路殿雅宗艱蛆已昌琢宗祇の發明の説あれとも倣ひ猶を香未句に出して体を定め置く是を座し定れた古くまで發句連の發句に旅の脇とまれものゝ第三とす　から須

留りも大秘之如是にてかとちハ手爾葉留と見きてん中ハゆるり字留なり翁既に大秘とまさまへり定益にいひちらして人の宝にもろなり浅くし見らるしとすての事へりかんく可秘
此外の手爾葉留是に做く推てしるへし
傳に曰脇はてに葉留の時ハ第三字留にしるるなりとかいへ差合あらすて留の場を嫌好に余の留を求ることなれあれや留ハ五文字の下にかえ字あるへし一字留ハ五文字一名といふ事あり口傳お句にてきるヽの字を才三にハきといふなの字をとなどつけるなり

○第三の句法

翁曰第三は大附にしても長高く主座し古法にて留りの沙汰なかりしを宗祇心敬の比より今の格式を立て疑の未句の時も第三はて字に留ると定り其の句を二句去りとし
又曰古書にいはく脇句手爾葉なれは第三文字留とす也懐紙に仮名の連をさくるゆへ也書法より定りたる如是の事を功者達人の業に初心なる者の留りをたし此第三を二句の間より出るやりかに心にて脇を隔るに安くは哀

○雅ん留の中のや哉留の言捨ゟ古式ニ误ますの口訣あり我留ニハうきらは句中ニ艳字あるへし
文字留の事程口訣あり
傳ニ曰第三八心轉して調垂し一句長言く轉を留らして本句ニ不同の戻らぬをよしとす春秋ハ季あり夏冬ハ雖之本句二月の季ニ正月の季を用ゐすあしく頃の季を用へしとそ
翁曰第三一字哉字ハ哉ニかぎらは一字哉ニて留へし暮春の本句ニ暮春の第三もあるへからは
逆筆ゟ落の香すもよは
傳曰四句目平句のはしめ之古式ゟ初心の指ともなつニ於てハ切着の揚ともなり句作

うつ移をよろこ之
但哉留の本句ありては留の第三いつはりて姫ひ終はりも今ゟ姫をは初座の本句ニ初春の第三季あるをよらは他倣之

○四句目

翁曰四句目ニて春秋の季を済す汁月花の句をあつかう事ありといふは記あり四句目ゟ済あり

○心得の事

翁曰第三より後ゟ一順ハ上の句を貴寵す中ニも月花ゟ名ある場之花功ニ賞すし而ハ

轉してうを考案すれは云葉のたしかなる絵の如して附の情しあり三ゃうちかゆへは五一つを不為て他なるへし
表の月の出の句ハ一住なるて他の平句と同し所なるを但第三の次ニ於てはほの位を持へし
傳曰初裏の三句目擱のもしめていへるか筆を路て附起なし志河もへくはさいし出る居しは
又曰名残の表の三句目程まんはあるへし初裏の三句目とても一條起して附路すし
又曰惣ハ月あよりも大切のものなり殊ニ春秋の季ほど同格の位へ此故ニ句数も連

同季をせぬも懐帋の法らを覚ゆへなり
翁曰初裏ニ至りて四春八木ほと連歌ニ古法ニ四句目春を出されは八句目ニも植物をも出さは月もより合ぬ生室を座の遠近へ俳諧もまた済あり他の句ニ不へ並ふ及さは其季出なるを花を附へし是を呼出しのはといふあり然乃おし秋季を遠近せす季ほ句は花ゟむつかし花葉ふて連歌の極まて前句より慎といへ是俳諧ニては沙汰なし
翁曰月は定生を出任ある事十句もち尤ハ何

秋と同しく流く之哉て季節と同し扱ふ季語の代りもなる物之月急の代りも季ふ春秋のちしめの句ニ用急あらハ其季ニつ堅三句をう急をさるすへき也
秋二句おふ急出るし四句急をつゝけ春秋の三句目ニ急あらハ一句春雜を附の へて春雜の急をおへし是又秘事のひとつなり
同季は五句去れとも季季の間ニ他の季ある時ハ四句ニて並る事ニ隔之又季と季の間ニ急ある時も四句ニて並れ隔之是則急を季語同様ニ扱ふ故也
是又秘事
傳曰落月有月の句ハ付る所ニ依る口傳

不入ハ更ニ此ニきりて三折もよくたお無ふもなき々の成り成と称ふ難きりもよりもしも定例ハなし歌仙ニ無々のしかも家元の晝式なる故之月の座ニ月の字も有明の字もさし合る時ハ異名ニて是へし月ハ上乃句を貴號とれ落月有月ハ流るゝも一し法ニハおゝれ
翁曰星月夜秋季ニて貴號の月ニハ洩れハ難き句ニ出る時ハ素雜ニて他の季の月明をての附句致すへし
翁曰月といふ字ハ五句隔川と新式ニ有り

但月の字多き時の字あると
ある時字ハ月の字を出すハ法外の交格有れとも初心の者へ是ハ不許されかすれハ字返切者ニすへからす
○素秋ハ先ありすすれとも少きて叶はぬ場ニハなきまんとあるへきハ古法なりといへとも當流ニあきを用ひ付る事當流の法なり口傳
門人問月ハ何句去へきや
翁曰何句去ても出るへし間ニ他の季節ある時ハ五句去なり
翁曰句ひの花とのふ事千句と夢想ニいふ事て是の會ニ申さる事未練の次第之意趣ハ千句満座ニ

月二句素ニ移ニ致り此時ハ月数八ッ之名残の表ハなにくれもなし

○花の事

翁曰ハ四本のうち下の句一句も許りしは致生満地にも定坐をも渡す事なし或ハ貴號の花の句並句への附意致又其句の意を除く実は梅蘭牡丹なとを下ニ流ニて仕立花となしまたは草木に花香ひ季を定むへ新然或問正月ニ花を思ふ九月ニ花咲事ハ不句は何とあ川ふを知ふや答曰正月の花ハ陽来

香を炷まより匂ひの花といふ
今ゝ名号の俳諧ニ云何までも炷なり
又匂ひの花ハ祝元の契りて後柏原院御宇久我家の黒方梅花の薫物を賞し給ひしを牡丹花進上申されし時何ニても御褒美かつけ給ハんと勅し給ひしに此花のまへやさしく思事申されしかハ勅許を蒙りたるより匂ひの花の称出来たるなりよつて連の席及ひ俳の席にても此花の句作る時かまらハ黒方の薫炷事古実と云ハなり
但於俳席今ゝ此花吟声の時炷なり香主

美名なれとも子細なし九月ニ花咲くなとて
大ニ讃之なれ共ミ名木を隠して花といふ句ある
なるへし花ハ櫻の事なりと教へ来りしを
いふ是等を正花ニハ立ぬなり花の句多く出
る事宗却て賞翫して宗祇時代よりハ正式に
花ニ本宛也それより宗長の時ニなりて聲の花一
本両吟と川
勅許を蒙り夜の奏聞なりしより花四本雨二ツニ八
極りたる
波の花殿の花古式ニハ正花にあらすといへとも

の習口傳
傳曰それ花ハ万物の花にして櫻ニ限らハ又櫻ニ花あるまいといひハ又いちくさくらさふまりもれハまてまりし
呼出し花といふ事
一座の貴人或ハ貴翫の人ニ花の句を乞ひて春を引上て出すをいふ
去来曰猿蓑集の時花を櫻にかへんと請ふ先師曰古今所以いかんに答曰凡花ハ櫻にあらすといへる一通又聲の花又ハとらふも櫻あり早咲花ハ咲時節をのつれとしたと仰らひ侍りたり
師曰それも往昔ハ四本の花のうち一本ハさくらなり後いへ所ニ所謂うきふる花ハ兜も角も作者次第なれとも

扱へも正花なり用ゆる時ハ見過りなり粟堂
の花同事なりと是ハ堂ニ宝前の貴翫なる故
を遁れ漏きを感し

○花櫻の論

翁曰花と櫻の子細川玄旨法印より秘して花
咲先生へ口訣し給ふ正傳ありといへとも後
さらに用ゆるものなし門人去来子々猿蓑の巻
に其の花を略して彼傳を聞き事ありて撰して
櫻一本の時々咲開く或ハ答るといふ字を置
へきと是正花ニならぬなり

すなはち是を経とする加へなんと論なき事とぞ

傳曰落花といふ事本歌にさへよめり一山一遍をさし平一面に落花を見るさまをいふ事也

篇曰百韻といふ事百句なりとも百詠百吟なともいふ篇をいふ韻とハこれを知人なし俳諧の大事是也此韻詩を次て割る数なり雪月花の用所明ら

櫻三品といふ事

山さくら　さくら花　花さくら

山櫻はちりけしきを貴ぶとすさくら花は峯にもふもとにも満山の花爛漫なるをいふはなさくらは咲散交ての体をいふ只さくらさくらあるを專とす又強ちにかかはるべからず

○名残の裏の事

篇曰名残の裏は句数事を揃ていふなればなるべく句作も落し不深切にやり句なるゆへにとりとまえあらんは更に事をとらぬ耳なり抜あるを嫌へ

なり表八句裏十四句之裏十六句と数を定へきなり律詩絶句の姿の数之仍て表四句目まで起承轉合又五句目より起承轉合月の出る所の所なり裏の月花の出る所なは起り轉の所に極て出るあるべき韻の字編なり

歌仙の事

寛文六年離屋立圃常陸國飯野八幡宮へ奉納の俳諧より始ると云説あり其奉納の判者山岡元隣なり奉納集に元隣ら誌ありいふて歌仙俳諧と号ハそのかみ或人三十六歌仙の名を句毎に裁入と二折として又雪月花を入て三句に結び始りし

さん又句並を追ふても及まず揚句は附け放ゆくれといふ古説も一句に成して一巡座し兵醒る中だにかくいふ又並て挟し置ともいへ主にの不著べき継結となは統にて付並ばへし揚句は発句の主又は亭主の主る所にあれば始の一順の跡に執筆の句なくば執筆さ事なし句なる文字を用ひず相傳は如是あるといへども賀莚追善などの會には嗜ある能ものもゆへにより發句を名残の花を用ゐる事もあり其ゆへなれば句も

よりてひろまりて然後
にを名をうちち入ぬ作し
てら卅六句を清らかて
歌仙の数のあらいとのいふ
へ紀を倒を背て歌仙俳諧
と云へ〔?〕と云く此文を要る
まさのかくと書れを極て立
圃ら作意ともますめてし
立圃同時の人又但元隣
風流にをなさんと云の
かとより世ろ〜く来る事
の中に組ト云もあるにや
出伴つらふしたるとされ
かくされ此時代より得し
まるる物とも思へる
翁曰師様釈座意の習
ありし此事誠欲作待お
秘し伝る大事人事世の
中の宗匠を考て此重秘

亭主ころえかもとるり外のよのする作にまさ
あれ其之所以ある俳諧にも〔?〕句ふさはしの
並ふ中し於名残の表之し揚句も〔?〕自然と
まるて猶是之発も宗床て〔?〕の事を述て
呼んも且難諸時をへし帰る附まとりて又其句
の事も云ふ禮を専して雑帰まるし但当句
不同意に其ことはいふにあり作句ひの心ともに本
武命に猶そへし〔?〕名残の表といふ慶し

○戀の事

恋の句昔より二句附されと雑に昔の句ハ並日

をむかす露沾公へ仰へ作り
し外作者法意に結ひる
神祇ハ神祇の句に二句
云へき也と三句去と覚
捌手由練之釈在同意之
神祇と神祇ニ句去事
恋の情の神祇格式之

懐紙の端作の事
翁壮年の頃俳諧之歌仙

に恋の詞を集置て何の恋の次第と不同也恋
ある事て大切之作者安らかに宗匠宗砌宗祇
の比まても一二句まて止事あれとも俳諧にあらは
此後門弟子篠して至一句まても是へ打続き趣
になる句恋とも恋ある作とてもさため然し打句所
ある也必恋の句附て其句ともに恋に取事も一
左様の時は其句のしまして其次に恋の句付る事
及給ふは新式にも其沙汰あり強ちに篠まる所
にもまるの宗匠にまかせ事し

○懐紙用捨の事

晩年には俳諧を連歌と
おり意味あり晩年を可
用
ちしめの名は三十六人の
歌仙の名より起るといへとも
法式定りての後は只三十
六句の連歌也
本式十句表の事
神祇　釈教
此二ツの内一方は
本句に有なり
月　雪　花　郭公
名所　羇旅
如此出ス
恋は不入
五句目に極めて名所
を出すへき法也
月は定りて九句目
前田世には表十句は古人
多し裏の法義多沙汰なり

本式千句表の条下に古法表十句の作をもと
よりて今式は表八句の後裏二句を足すて表其
まゝく誹諧の類をよみまても連歌にては
俳諧を由りて大風体師曰いふはなれ也ト之
連歌に鬼女能作品さしむかふ数の表のうちに
誹諧にも鬼女山姥やうし千の外人を殺す切り
縛るなどの類用捨有て是れは各類の外にも
一句に立へかう次或問恋の詞述懐の類祝言
いひ出すへき句をいかに作らん答曰句によるへし
文字なとあるらしかれは假令祝言にいひなれとも

表は古法二句之秘也
此二句に急を出す事は
今首尾の吟として表六句
裏六句あるうち自然に
古法の表裏の数をかきて
ひらくるは道の天然なり
千句といふも十百韻之
数にかへらる式なし
右古式の意を考ふ
三ツ物の事
翁曰天地人の三ツ也発句は
天意なり脇は地理
なり第三は人事なり此
心得の上にいふものも
自由あらし歳旦にても
三ツ物といふに三の数は
形器陽を好む祈禱也
古人の名面に出す句
作らはあり古人を体と

人の上にいそく述懐なり古人の漢詩の数
も苦しからず壁書端れにさまで多くあるも全
く家の体あれて慎へし他人の句も咎むに
及ばす又問に忌嫌るは表に誹諧故事本
説を下すまに持てる地に名所さしよ他の事も
のことは假用するあらの句の類もいかゞ作らん
答曰大方は表に誹諧へし事によるへき
ありて詞に出すなら下さなに誹諧を持て
くるは作者論なり又問古今の人名表に出す
事いかゞ答曰その人の名も誹諧古人の名も
連

これは用ゆる事に例へば名
を浮かして別のものを其に
句作りしたるものにて是にする也
又古人より廿年 此方の
名を用ひぬ格なり 新しく
ハ表に古人の名出さぬ
ものよろしく 翁の法の古
ひとしく
翁曰 恋の一句目にて自然
を得たらん時は流儀の
外能なり
又翁自筆の書にも恋二
句中五句と七句と隔て
る流儀なり

古よりて昔からは花出来る事あるを其人
今ある様に句作まで変格なれと定て
するゆゑ付所寸又同懐帋に恋の句なくてハ叶
はぬや是を好む由縁は如何答曰此事は至て
大切の事也 懐帋に恋の句を大切にするゆゑハ
神代陰陽和合して豊葦原草創の也故なり
恋なくてハ叶ふべからずや 忍ぶ恋も 一座一
句のその連歌式にも四十をのかぎりをする事
いへる鬼女能席に一つなくても俳諧にていひ
かへて又ある人にたとへて帋座電す助の転

桃青門桜に花を附ることよ
うし望をつけるが當に
名所を附るものあり 不義
なくして此格の表裏なり

なり生類の虎のしは鋳ならぬとも名其名あり
ともらにても一ツ異体の数をさゝめと 作る是
に准ず
花に桜付る事むつかし花も其の袖なと出れ
物に似殊のさくらをつけ殊のもとハ桜鯛なら
人の手にあるものを付る也と当流に是を用ひ侍
花も桜もまうらと不明に附るを習とす
辛崎乃松は花より朧にて
山は桜をしほる春の句
櫻の句に花の句を附て後花にさくらハ

古武を取てよく活かなら
作してよくよの意趣あり
さくらまこ湊市の
あさくり
大和路へ入る
はつせ寺　翁
如是なり
千も相因果不二義り
不縁あきり前後なる髙
山の前にや鐘神歟
の趣あるきる見よ
時の様をさる中へなり
あまれとい不易三義
あまあつきと畧しける
あられ又哀傷の心をなく
て物を憐む素の所なれ
あり二ッなり縁と哀
傷の気れハ素より縁よ
いまし及ぶ

から次　吉野に花を附合し去年よりは去年に
附合したる櫻も同し吉野へ之他の名所も
是に准ずる句の仕立中に心得あり
但是古式なり
都にも去年を去し水海因果之元名所所名
故なり　いかりとハ去年に庵とハ旅て釋之

○雑説

将の事　いろくる将と斗ハ雑之生類に縁する
巡将とて国の治平をあらし兇さんと
勅使をたまふ是を将の使といふ事も余に皆

将あることハ生類附て
妖るる歎きとも極て
作しいわ句作まるべし
浮世といふ時ハ大きくハ述
懐の心を含へし表ると
まハ素論叢をて附てし

求もあり縁なり治術の鐘兆錯濱底居字附
ら作砂の崩て空に来る所といふ但濱字（ウロ）
ある底をいふ時ハ句論居所之　但非居所濱底とはりしく濱字の家
の前にかけて作るる句なとハいふて及るる旅行之濱字
の岸の根波にされるあるま上の方あるりおてきし出るとき
稲莚とハ稲の穂の莚を数ふる中へれ見物をといふ
植ふるの類も昔わし石粒因し　世の字の事浮世
と述懐之世の中を平生之平世とハ何の世よも
かまる世の事に浮世とは憂きといふ心あり
そのうは世といふるを但浮世といふ句も述懐
のあるるなれハ平世なり萬の事かあきの分於

月並の月二句隔て月の
字出さぬ法なれどあれは
句作りのうつるふゆへ
但し明の字十二句去夜中
まつ宵の類もあらずあり
へきたけれ異名にてせぬ
方よし正風にては大方異名
にて出さぬなり古集にも
かきまぜてあるべし

句長を操る事論あり
と貞徳の説もあり句れ

あるべし其他推て考ふべし
月並の月数字にて句作あれば本月連歌に三
句去なり俳諧にては二句去べし有明とも植男
ともいへる法あり並て月の字明の字をも嫌べし
同字なれども月とうち出しては表の五句大切之
連歌は一座にて十八人の事之當時俳諧に連
仙といひて表一巡の句数なり
花前に上の句出て又下の句を撰もて出す
を次に又出勝にも句勢にも由てさるて其も
甚しかれば長句短句れ混きなきいはぬ

けふかくなる秋なる事也唯
集るふ見るゝの乱雑
なる秋やうよきなるの心をも
り部ける事あるへし又唯
一句附様にてきぬ物なり其
といふ説もあれと先ず記
する古集の中にも一句限
の名も見出せる事也

事之ありし故に花下連歌中比の事也昔し慈照
院殿大原野の花見の時宗碩一巡より下の句
六句附け裡一順にて長句一句附け先公
家武家十八人の句並を撰んで出せしなり花席
ふりの事也
水流れ表に水連歌に水字あり俳諧に不用雨
午並て句連歌に勝ふ俳諧句作によりて苦
しかれば雨年に傘蓑の類也
夕立連歌に夢に二句夕の字に五句去その字に
二句之子細は畫過ぎる夢中にも降を夕立と

いふよしなり例へば是を用ひても[illegible]
正しく語和なり夕の字立の字付て名づけし也
ら𛂋白雨と書べきなり野分又同じ暴風と出
季となり
木枯のさたちの事木の字に二句風体に二句
枯に形を経ふべし風と書てあれど是も木
名づけし風とはいふとのなり木枯といふ句に木
座の腰かけといふ句あまた詞しれたる之
大麻連に犯神祇俳に神祇之
恵美須連に神の内に入られ例へば神祇なり

木魚鈴磬に限るなしきや
翁根源なれども此数多くへし
推て倣ふべきなりや

人物に張を付たとへ紀行の
場に木気なり出家なきことを
曲に作りて木の葉衣を着たり
と云数は皆衣の数ひに引て衣数
にいたるなり

茱萸　良香
冬の中ふんは遠て春季
に用来れり不吟味なり雄
略記に見へたり

変代主命なり　猿子の命亦ひたす鞆の如きは異名として神祇にあらば
木曾路野路非山路なりし遠く越る坂なり
小野の奥芳野の奥同前なり
木の葉衣連に冬之衣数之例なる句によりて分数
あるべし伏羲神農の如くの者天木葉衣着し
袖の露恋なり句体によるべし
鳴の巣連に雑なり俳には夏之水鳥の巣都て
夏なり
鷺の巣なとは春なれども夏之表の宮雑なり
東宮の御事也

鷲之泉といつれも雑之
源氏にてよめり
石碑木と云るあきらかならず
也あさぎと云さくとよまるなる
反之俗にあさほらの碑木古
る反之
右二ヶ条翁の謂之
村田句の趣よりて秋を付れ
も秋になる依なり
一住家柏之俗に曰
一柏一名三種
一ハ水中の石をいふ
一ハ松を誉て云
一ハ何にても石にて調る
ものをのきざる時の墊
の名
又人の常の事にもいひ又
只橋を賞ても云
但クヌキも柏ノ内之

草枕植物にあらねば遠路なる事之等を枕とし
も非植物とする事に極まれば
笹枕菅枕植物なり
村雨季なし但春秋の句まで附てれば夏秋
乃有になる句なり
玉柏石の事之又屋根の瓦を差すものあるべし
かた事ゆへ連す雑之例なれば涼しの句にて季を持て
湯実ともあるといへども夏之夏也蟬撚とかや虫之
旦に生て夕に死をなすあれはすに此虫之秋蜻
蛉をいふ又日影に鳥の飛かけのきらめきとも

又壯圖にて雲を耕ふ
そのハむらハまあしは
むらかしハなり下の説
誤之

かけろふと云なりとかたちに端案水の月
なとのらか水なり又聖も世の等の等れかたちの六日
影を雲のさしおほひて陰に等るさま之此二ッの
物を雑なり木の雪のかけ八翳陰の二字を用ゆ
へし松の門杉の窓板まで以上之非植物 但松の戸松扉
住居なる隠者の住所に云なるもの句の仕立によりて植物にもなるべし 楢柴も雑なり
椎柴も秋之
不喰 但扱へも季を持なり
繪に画ける蕃の類連に雑之二句之例に
葦鴨葦田鶴飛植物也川田に田の字附ても苦

しかるを仮名にて書法之
夕闇彩分之宵やことゝ云事之夢附分ニ不嫌
時節ニ附の字附てゝ不苦春日ニ春の字同前
富士神の字連ニ二句之例ニ不同意
軒の池屋め連ニ水辺なり佛ニ不嫌
發句ニ作者揚句まで以上六句引して来す揚句
の作者を書なり句引とも出ぬ連歌句にて書
然に唯てさきすなし
九月盡の木句秋に附て月なくとも可然也七句目
仲の季まで月あるべし

三月盡の發句に第三礎の句出にし是
九月盡に第三名の句附らすも附て四句目名
於さゝ有べし

此二ケ条大切の事なり可秘のこと

新式の大意は未座の人初心の人句浮出すものを
押さへん之此の水に水音ありさら硯の水の打きる水
定近しとて執筆のふかきも初心未座のものにもなす
て任せ式にて一筋心得んと宗匠なるの業なる所初
心の人未下に附作らせよきさし合にもかゝる執筆
の故実なり本式にも記るなり

前日夢想の俳諧に嫌ふ
附くさき...外前の發
句よきなきと附る数多
かるきと嫌ふへし

揚句の發句様の神祇の意にきらはれし事
八ヶき事之
飛水東との連歌に硯の五軒の東水漂字の波
新式に字数多し 但字水は水辺之雲と水と
の類まへて俳諧には器物之屏風几帳珠数連歌に
用る品なれど俳に用る時は横言葉之
道具の俳諧に鬼の字地獄の沙汰に申なくは
嫌へし
夢想の俳諧に夢の字ある嫌ふへし
移徙の句には焼燒倒 其の言葉 字ちえ係横き の類は周旋すへし

又玉梅いむ了魂やなき
...酒之々
わさ中しき賀の...
...

き佐様き
去へし
元服に元山神来月の發見等の以き句数多く
あり然て初心なとは句少く古体之初心の数寄あり
とし家道の句ある見を附る不経さし古き発句
なるを時にて則を捌きるなるれ家道切なれ
なりぬへし
一座に一句二句三句四句五句数々のなく定法
なる後の附は仏たるのを考てさくめ是の之
さかなくちらしを持ちてはかりのに一定すれば数
多仕分也物をさるむる是よ至二句三句七句
直

誰のすゝきに鶯を
あつめて
雲の形を葛の絨帯と
なしけり　蕉
是唱句之
又伊賀の木且島邨之允
へ書遣しけるに此句は
(?)とて始る芭蕉の
巣の當
(?)の中より不門

抄れしくはなはだしく付の文字中に定めて或は表に好みとのも非をきらふものもみなしきるなり之不縫附着繫物を出だし事不好事之大中に連歌に二句とりふとの之五句五句とりふとのは七句と俳諧にては沙汰なし

○唱句の事

唱句は漢にも倭にも本句ありて始りの出し事基とする也されば歌にも下の句を出して上の句附る事流布して之より連歌も起りて後に発句平句を分て云に流れて定りしより中に種連歌といふ

又へてと付たり　木旦
芭大きに悉賞じ之を書籍
にとゞめり　凡寸
是も唱句之
此句廿日藤堂新七郎へ
遣し給ふて誤り又付も
有後しく傳へあり
賤の為る石の巣に
當に云句を芭の(?)
始りし之
又曰漢和の式は唱句より
起りて漢和聯句と
唱へ来るの之
漢和て漢文字並門令
之不好之
此五句の事古式の定手
是をつゝまず
擬するに歌句ハ所謂
句作りし題中を雑とは

歌を翫れたる詞の約りしに今は俳諧の連歌となりたる之附合修行のためには唱句も学び漢和は第一唱句を定め起りより漢和聯句と唱へ出来たる也当流にてはさほど好まざる事也之

○五義之変

歌の篇序題曲流俳諧の曰くにある五ヶ条の化生ならば此五ツは味はふ事也一の事之未練ならばいふまじき事之此五ツの情歌乃五句に環のごとめぐりて一首となるもの之

連歌に歎句練句といふ事ありこれをとりて俳諧

しか義をくまり正しくいひ
うるめるまゝ方之誹句ハ法を
起崩して其ふるく作しくる
学体の句ハ平常よりくる
作るゝ志あり先達門の平
常ハ作るゝ中より出る句
体をあれこと其ハ申まり兎
角して作り申して出る句
体ハ出来るゝ之歌句し
其人それハ真の其あるもの之
古池の吟ありも歌句ゝ手
へき体ハ之ハ未熟ハ学体
常よりて中子乙より也
りのあるハ大方ハ行の体之
其の句ハ当世善悪を心へ
る人又ハ更に好て句作
筆あり世の下ありまう
かくのとし

当流の平常の句ハ誹の誹なるもの多し　此位
あやうれ場あれも当流至極の境と申事し
されとも其まゝ誹句を肯とし人ハ兎ても未熟
歌句ハさきくに正しく作れも神明祈り
或ハ祝言なとの類ハ歌句ニ仕立る事し　其歌句
にあるる句をいひて

元日や神代の事のおもはるゝ

鷹居て其境まても玄之のむ

是等なる歌　誹句は当流の常なる中
にも当りぬへき也

蕉門の俳諧ハ古来の俳諧
にあるは詞一体のみ
にあらずと志ありを詠まる
故に五七五十あり故て聯声
に用へき事あり　故翁も
此古法体格にあらはして
用語さらしと見へたり　俳
門ハ去来を名目の下より
まなりし不变し此故に聯声
の法あり先哲も蕉門にハ
発句の法あるされと翁も
体格を守して論ある時へハ

柴戸や錠のさゝれて冬の月

嵐の羽もかいつくろひぬ初時雨

いさゝかも違ふまゝ詞も定まれは此境上にも
至れ大切の場の心ハ力なくても仕かたなし
所以ある時の発句ハ五言連声といふ事あり
通しと五七五の句体をとゝのへ詞正しく
思ひもいりて聯声に及もん是になりて強
く詞をまけお亀をあさんとせも句躰をくしなひ
斗の角をきえんとするにひらかなしといひて
天地鬼神の感応を得ん又ハお亀までいふる句

なからんハ老の誤しといふへし勤て知へきなり
なり

翁曰切字の事助字なり然しれも切字あれハこそ一句の続様を定る付切字とて極て用ひいろくの体あるといふ事ハなきなり初心の者め之なの事察らぬうちハ体裁の鉢銑にあるへし

を和句といふものとんは連歌を言ふ誤なり

○切字の事

師曰切字なしの発句の事得拵ある人推量に免しや侍るといへとも一ツもあることなし初心の中に切字なしにてよき発句あるものとさへも切老の人に切字をいつれにあるも発句にも附云聞へき事を志ることもよき発句とても持さるへく此内意を知る法を撰ての中く此大事を得拵をこそ見え侍拵の事なる安き事をなすに宗んなる者となり之

天地の間ハ都て実しれは八塞り有用まつるを物ハ虚ある所に多量の用をなすは物の名の前の義明ふ大道之禅之言称す所心の余る所ハ虚の地此所まて発句に篤りて精神の入不能く味ありて安心寸へし自他の詞ある所ハ何の体不因意

又曰詞を云残す所に余りて余情を含む意をさして切といふ

又曰自他の分る所ハ云葉の体も不足句の切之

傳ニ曰

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

けしきとゝのふはよきあるはおかる月と梅とをかくなる事といふ所の詞をあつめたる之

咲みちて椛の中より神さくら

椛の中より沖し出川桜

赤々と日はつれなくも秋の風

初に早く伝授きれしとある
も伝授かくのごとし

世下て文政の今も尚此伝
あるは宗匠なりし余ハ
更なり

日を隔もなくも今ぞふかれ秋の風のかなしきに
日まへみしかくなり申くといふほどの詞ありけり
師曰斯事のごとく此等大切の伝え熟心ならぬ
輩に猥に伝授ありしは定を守らざる事私
にあらは此伝法系干渉さへ絶ぬるや近世切字等
扨句根干きこへ侍るとあり

○手爾葉之事

翁曰俳諧伝といふ事古来周く多し予年来
此一道にたづさはる事力を尽し神に誓し因縁
を尋て明く妙なる語を教へ以ひられたる所は

翁の五師
梅翁貞徳貞室季吟
宗因
今一人は極て遠く古人
宗祇なるべし先貞徳翁
四人は道を導く遠く宗
祇の心をまつり然して是
を以て又捨て西行以上古人
の肝膽に入て読コトを実を
発明ありしなるべし仍て師
とし給ひしとの語あるな
らん

われに師五人あり師として法をうけし俳諧に
兼能の時日をかさね為合へ立と云もかれんと八
句者と云れんこそ兼能の本意なれ此境を志
要所にこころなし法筆にありといひ其見所と
らはあるらく老舌志ある宗匠のい 梓くなり
芳席の不具浅学し貞徳も全く法筆なりと打干
本心を確くむるの学法繕ありなれ一生の了
簡も要と盡する高情に心をとめぬこそ本意
少なき手爾葉を先姉小路殿の一巻よく明ら
めでたし堂上の各もこの手爾葉の所なし俳
道

畫諸道ほと隔く名目をかけて職人外治定し
或は疑のやロの批あと数く義を無しとしるす
自在の格に行く其業末手に檀業は歌文章の
人にかきらす今に諸語の上にも是にあらされ
も言のまゝ俗のきらひ然れは天性計のれ
に優れたるその人此故にいましへは手に粹業
を教ふの畫なりしと世にそうて人の凡俗
になりし故にこつらへ明らむる事かくて畫を
得て学ふ事まるもゝに粹て歌よむ事をさて義
申とえん卑しとて古人手に筆をは公界なりと云へり

古川此等をさして古對古句をも多くよみを
自然をまる字し法士の義公なりさるすを
年来然得うしに近来桜井一家といへるの
手に葉綱引綱同盤の筆塩といふ畫をあし
も洩らず義ふとに後の廣大なる是筆にてまる
歩しうて此二畫をもて又らは後の筆とせへし

○雑の句乃支

雑の句に三つの基ありて一ツは二季兼たる句二ツ
には當季のその節を川にさとりて今をいつれの
季をもたらさるもわかちかたき句三つには當季ひろ

道

雑の句と無季の句と世上
混じて同じ事に思へり是ハ
あやまり此下の論をもて志
るべし

他門の古歌古事をとるハ
和歌の詞をとりて歌にす
るにて形を吟したる故に
あるハ糟粕或ハ溝粕とあり

またハ季を題とし次に所を題として其事
を題として其季に珍らしひきのに仕立たると
ある名所にもあれ何事にもあれ其の題の中
に寄たる雑の句に作りて題縁の揃ひ
まへる

無季の句也旅名所雑なと讃等にハ季なし
たゞ好事を無くしていふ事なれば季の詞入
たる時ハ此格に志るべし

古歌をとるならバ和歌にては二句或ハ二句半に至
過ぎざる三句なる事を定めまた句は一句半までなり

右よ蕉門の古事古歌をとる
や本歌本説を備へ定て眼
となるべき詞を二三字取て則
義を歌に縁ある故古人の
心を立て古人の力をかりて
非力の例士古事古歌を
云事を嫌ふ也

和歌の古体ニ五字余する
も余ある體のものに句の
字を辞すぞし詞一和ある全
体の中に余字もかまを去れ
りとそ流派にも云るに候
続きたるもあるにや蒲ハ強
て是を論し其体の字に
も是を歌にも手格をとりてる
多くハ是に出るも亦古生然
の詞調に叶ひあるにて左な
くてよろしからざるにや
例も手格を用ひ其と為

取へし然句ハ上の句并その事なら放に二句
去るハ秀句となる新古なし此覚悟専らにて
古歌古事を二句に仲の句見へて無き所を学さ
る故に程大切の覚悟なるべき口訣なり

文字余りのこと天性文字は気にて移れども
延ひのとやうにて有ぬし貞享の比まては猥
に文字の余りたる句あれども当時ハ少し而く
一二字にて足る多く余れるハ宜からず

猥等の句貴人に對しく事有りて猶揚逸の事
身もなし其付に季事を中にて其の次の為きを

てをもちひし見る翁ぞも用語
ひしと見ゆるもあり又拈弄
も見ゆれハよく一句の閑義
をわきまへずしてよく知て
もなすべからず茶番してをぬ
ハつるべし

猿猴の句懐遊卑下ゝ
より諧謔滑稽ゆゑ
曲をなすハ悪実情にて深切に
作意しきりにかくれをよ
とハあるべし

季句ある
めづらしや出を出羽の
最上川 茄子
をりしきやかの古月の

承阿ゆゑ昂仏比論して句作ハ平常の出會
なる手拍の写にて無心にいひやしなし猿猴のやうなり
又猿猴の句も人ゝなるが尊者の人のもとにゆくにはなの
句もなへしかも其風雅の交を偏意なく寄やしも
かる意在り山の井の浅くも人を思ふものの
かれといへるは当に人を卑下してのこゝろなるべきをその
藤しる詞にも見る其所作にいひたる風流なし作
もへし
季句ともふを知らずに作り連歌にも用ゆる例は
時は定まりたる人さへある時はたしかに耳にたやすし

洞果山
見季句あり

此句を作るに画句図句と
いふ事あり画句ハ活物に
て死へし図句ハ死物にて惟
季し折々ハ画句といふハ絶
景を見て其景の趣向を擬
すを見定て眼を閉て心を
以て其の画をなして其景
を捨てお日の紫の図句ハ筆法
も捨て其景をおもふにしたがつ
しるゝ其句を図にして一句
となすからずして句ハ画をて
のこゝろを見て其風景の
見定まで其景をわけ見れ画
法にて出心なり活きハ画

句作も悪しく又初心ハ詞のいひかけにかゝる事紀
是を命ありとして心をこゝろにちからをつくしなきんは
猿にはゆるしかたくや

○費句案文の事

翁曰発句は頭よりすらすらと云下し来るを上
品とすその二つ三つ取合せて作るよりは黄金を
打ちのべたるごとく作るべし
又曰此句も取合せの題にその物を取合せて
よく取合せを上手といふ
又曰題のうちより案じてはなかなかの題の外を
出

のまを捨て将出かしふする
なまして画なき故に死するん
句も今く如是しなまかくいふ之

又云既に竜頭蛇尾といふ
事あり上を下とつり合しく
たとへを上にはめし云ひて
下の句さゆるやかに習る作の
事を蛇足といふ事にある是
ハたとへは五七まて句となのさ
る時趣の句を立添する故蛇足
いふぬりのをえていひそへ
なきまる作あるへし

習出ものなるものゝ之
又曰赤句は一つらのゝへに仕立る事ハかさね
物なり
　毛衣干しつみてぬらし鴨の足
一物のうへにて仕立たると云り
習の調かゆるやかに一人まよりて一筋なる故彼と
是と工夫ありて倫熟をはかるへし
又曰發句は流つよけれも赤句にあれは
　思ふ事敏捷なる人發句に極りぬ
越人か句をみては流つよきかと見へしか又此

翁曰祝言の赤句にてもそれ
にも千とせを代なとしか
きりおる句悪し多くある
事なり

翁曰他門に入倫言倫の姿
をなしれ口中に曲を含む事
あられ心中に曲を捨るはあ
られ口曲ハ他門にして心曲ハ
正風なり
又曰赤句は十ヲあれ句を
七ツあるとし三ツは余情
に余る物なれとも其三ツを
もて服を調るなるへし、
雨声閣といふ事
明月記にあり是ハ歌一
首のあらそをたとへていへ
る歌なるを赤句にも雜り

重ね出来たり月影かけなく蚊帳
の句と出来しかもぬ色を君か代にかけて
柔且としは待る伸恕心重く句を離れは
又曰句を作る事作らぬ人の直を失ふ人の
作りよし調の作料へ須
又曰句は十八分に言つくしてやけし五六
分の句はいつとても心ぞ但かくいへもとて
業方を五六分にきわむ業須業は十分
にして作を五六分にきまるへし
又曰發句は大方物語の中にある物なりと

あるゝ程ありけれどさらに
少きあめれど又さら絶ず
く残りけるゝあるべくする
ぞ思ふべくもなるへし
のかたちを致する句の乱れ

かく主人公を出していろいろな句にあるなり
は作配可然主人公あらざる論にかく生ぬ物之
語にかく生ぬ無機句にあらは
ある句の題を動くしもならぬとりて専功者のう
へには論あるものなきのやうに案し入て出潮
りうり生気ある詞あれど動くへきなりなし細
心の句作あるもの歌の本情を見きして生物
に生気ぬ物をもあれるの如きんなく詞を
きりつき枝にやまん桜にあせんと染まり取
付る故に何にても菓へく見ゆるのも本情より

入らぬ故之嵐雪論は雷竈の謡に菅公大に怒り
給ひ法前にありける柘榴をかみくだき妻戸に
ふきつと吹かけ給ふも火焔と発して走し文勢
此法前にありあるものの饅頭羊羹あるも火焔
となる文勢まで澄らしきハめて柘榴の外なし
物の本情に照ある故ゑに動あなしと申妊
翁曰ある句業る時和歌の三十体染る主人方より
案し力ありいろいろなる句の心得に発へしよ
れ句ハ自おと三十体のうちいつれにもなるもの
叶ふそのえ

生

幽玄体　行雲　廻雪　長高　高山　遠白
有心　物哀　不明　理世　撫民　至極
澄海　麗体　存直　花麗　松体　竹体
可然体　秀逸体　抜群　写古　面白
一興　景曲　濃体　見様　一節　拉鬼
強力

連歌に句難をいふ事あり俳諧にも有べし
心敬僧都云凡俗なる句姿の凡俗心の凡俗之
姿の凡俗は閑へ安く心の凡俗はおぼきがたく
やすらん道に心地を思はぬ人の句にまゝあや

またる物なり景曲の句に八大かたなり有心
なる句を作り用心すべし
無心不差といふ事既に万葉集に沙汰あり素
より俳諧にも有べし記事之
去来記に
みかさ山の千尋の松乃高さみえね
あの中にはげてつもれる白雪
定家卿判曰みかさ山といふ名所にや又如何なるの
みかれ中につけ鳥のかり衣といふ歌をとりて
志出ると見ゆ松の高みをしれん得も一向無心
不差のさまとや云々
也

翁純雅號の一大事は他
のあらず事にあらず

人数俳諧の流にいらぬと
いふは俳諧の入門の入不る
あるべし

木をきるや霧の絨の
さやか風

手すりの人の句なれども
ちかめの為を字入門なる
べしさ人ぶりなりとそこを
し延て言ふべし纏まそて来
定まりもよふしく後

○夜学や夜の都なりけ
秋の庭

是八論の入不るなるべし
是本の論したるに又無遊
も是べしか翁の云とあり

他の句を吟ずる大切の習ありとら好みさを胸
中にさして兎にも八人の句吟かくしらまれを去れ
是くその句は天性を思ふべしうち吟よりして
感ずる句あり是八人をまつよく感ずしむる
句人又深切に聞されたる吟へかさね句を意味
深長の句なり強くおる至て吟て漸吟するに
まゝ又同事句に説ても句の入なる之
吟人正しけ此たる是を然る之已ら其明らと
も平作者の邪路に入て是を吟ずるとは志
あさくさらぬに入らぬ筆遊玄の心知不説ある

いまさらまぬるは
句を見る事大事の句の集説と不成説と新
古粘着類同異又古事古意ホの変を撰さる人
好悪とするの佐證様に至ても変志の力深く之
同巣と等類とはなの作俳無別あり
句を変えて古事を鏡にして其見をる此外あ
名師あらされは変志となるべし
句々の句とりの事歌に上品之發句又あり
古人定家卿の歌を評して云勝身躰に似ぬの
侍かりにては清失るまん句ひなるべしと
垂

なり
皮肉骨と三ツにわけたる躰予年来是を工夫
すること一旬くに皮肉骨絅に出あり骨をせんと
考皮をなさんと思ひ肉をつゞかんと択ふにも此道
の大頭ひ之自然と満足の位置に絅ひ未練の人
に教ゆるも詩をなすべし此境修行を無し實学り
も同然之
翁曰此句を門人に作らせて附合を先吟骨を
得たり
附合下の句に二五 三四 五二 四三とふ事

いろはも覚ゆるもなしねたる
二五 三四ことに
すきにたる花をさくさまてか
待まる君が来るあつまつ
五二 四三とこ
橋翔(?)里ほろきを帰く
峰の旅人の行末もたらむ
二五五二 萬葉なし 三四也よし 四三と続けるなり
好きなる人もよき句なり是を橋に伝へ
盡
○附句外六躰

ひつとり　むらへ　むつあり
ふりつけ　しみ出し　とらへ
是より我れ等菓辨に変じて変躰とを
定め得して広く身抱あらたを専要とすへし

○俳言といふ事

菊田連俳元一之俳言とハ音をもって詞を斟て
連歌にてハいふ事之連歌に出る言のもの是
を俳言といふなり或ハ屏風几帳拍子律の調
子俗なりぬ哉様の数あり千句連歌に出る鬼
女龍虎そそお千句乃ものゝ言葉にて俳言之連歌

冨小路正三位刑部卿の
君の玉ふ菊の花といふ
詞多く俗俳俗語も用ひ
ても歌書の中に限りて知る
所なし侍るの世の俳諧を
思ふまいやしくも捨くして
歌書の志ありつゝも付けられし
何なくまて下さるべきとなり

に於ける詞に於て桜木飛梅なとの言葉を名所まま
紹巴の回書にもあまた見え侍る小中の折みな
俳言也

但俳諧に於て俳言といふ事いはゆ連歌
にて俳諧に用ゐる事之俳諧にて是を
いふに他門ハ専ら当流にてハ誤なり

又曰俳諧ハ俗談平話なりといふを誤まりてや
俳語をもて俳諧とおもふハ道にあらざる事しるべし
如実なる事也　俗中の雅言ハ俳諧之鄙俗語ハ
俳諧なりと俗談平話を正さんが為之鄙俗語

蕉翁の論之退て世ニ見飛る所
風より世挙て俳の筆鋒を
とりぬるとそ

画ニ讃しを句をかきし讃ハ
と画題とのあしらひあり讃ハ
其画を褒て其画にあらはれ
畫題ハ其画を顕すして
句を詠出す画題の句なり八
何某題をも書へし

とハ蔦をちんひ雲縁をせんち牛房をあんかう
の類くかうるき名にて都まて云強し早結なり
た用ひかるし

又曰座頭といひさんより琵琶法師とも雅言なり
摩頭とハいもし及ハぬとも見へしやまてとらいふ
事し

又曰讃ハ褒る詞なり其画の意をあらはし作る也
外なる文章ハ四文字くにて書へき大かたの格之

○発句合の事

翁曰発句合 宗匠判と云ハ連中會合して論議

翁曰其句判中の宗匠点者判
執筆三人より五人迄宗匠
の数不定可然宗匠十人ニ
執筆十人迄ニ用ふへし
然れハ宗匠も三人より五人
なるへし
宗匠句宗匠ともに三人是
非なし一部の術を俗
是ハ満也難なり
仕舞かしも追加宴然也

翁曰俳諧文とは
し古代の文章思俳文之
とあるは文章の大意を述
へる之類ハ序跋をさしめ時

批判をいふ之結合は宗匠判の格也故ニ判
者ハ記とあし本判といふハ必序有
跋まてを書あり且又句引までも作る也多年
歌合あり是ハ格を倣ふものゝ又即興の判は
左右ニ文臺を立て判者あり難陳ありて判者
是を聞て後からも判を書なり是等は多
あり

○文章の事

翁曰文章の分類名を文章と云

序ニ　曲序　来序　内序

作らずとも俳諧の文体
は前に一体始まれる古
くしいふべく漢と和の境を
わかちがたし物語の文ども
古人手習ふの風体ありて
雨夜の「源氏」「いせ」「蒙求」
「つれ〳〵」「方丈」「発心」集その外
躰く一体くの趣あり「竹取」
ハ一言ハおとしきを依のもの
まていまゝ落る所以上
は双方それにいさゝかひんで下
思ふる容あり俳諧ある趣き
ある所それの文章をしもる兄
出しさて自然き事あり又文
章を書す序跋などは一旦
のものなれとも主客を備へて
ままる不改ものなれと依ほを
所謂ある文を書くは何れを
定すし読んで書出を求むに
さとし書きハ力あくを出る

右三躰あり

曲ハ　わき起りしを云

来ハ　今より前のことを云

内ハ　其當の内外事をかく

此三躰を兼て一序に書事も有

又曰跋ハ序のみにてむかしは序ありて後の跋あり

序も跋も其法は同し跋なる序ならば猶委しく

書へ記あり　怠く云ゆへ満足に書しとへ其の意あり

序跋ともに年号月日を出す事なり

但年月日なし　まも墨あり口傳将序など

幻住庵の記などは長明の
文章より書かき始めり洞
の挙白集など熟ひなれ
の文章ともすら躰にも見申細
物語ハ物語文など紀ハ紀
序ハ序などの趣あるべし是
とくハ序跋を源氏いせの体
まのさまにてハ不似合なりと
あるべし
武法古実の内平家口もと
まていひあれは仕到なる事
ハにまてゆゑのなりしなる事細
も正さねやと不略して問れ
てありある事あり二三ヶある
奉納とハ神社に納るを
いふ法楽とも神詠といさめ
多些事多く無断すべし
○無題とハ題の無法なる
をいふ
○探題とハ席上てかくし

を必跋なりとはいふものあれば序なりもち

序跋ともに口の書中し口傳也

○増補

前曰俳諧に六義あり歌の六義も古今集

にあれと蒙程今は六義を詩の人のこと

又曰俳諧の書をあまりちと無字を知ふ庵

うたし吟と詠人詠く調ひ字形の風流あるを用

ゆへし

又曰俳諧集をゆるしを申して俳諧集のうちよ

延

てある事を云なり歌の法は子
八雲御抄の任なり短尺
三折にして歌を書く一首二
句作しくおおきにて書を
うけ短冊の句を右の短冊
にまで執筆に出る枝折に
似
○常体 通歌なと同し

て作も無し あちの条の歌をきえて我を折うり
又曰六尺を越んと欲するもの右に七尺を望
へしされとも心高く財の彩経に入深く心をくだくと
きは古人の骨中をも得る事あるべきなり

師説録に奥書ありて此書にむかし考あつめ
一部の分おもしかりけるを二書更に連綿したる廉
あらんかされとも余か見んとするにはたくみなるまたこ
ともに懐にすまひにあらさるかし 予亦諸書の類
語を襲臥して書き我を照し文一二の増補を追
加して序とならしめてあとれまほしく 情をかき
あらんものなりと

常照居士

夫翁の句法ハ句に寄て法ふよりて世にあらはれし式とさるの書なし活法自在を命としてはなはだあめつちの乃ふしぎにさまたけられす此ハ弘をさしのべて法は私の情も是に繕ふる道理の人ずつはかるを志る経は人倫の理に落るにあらす心をさゝかるる言理にさましさまのまさらむ流義法式なくとも先の其ふ理ハ遠路の深きに徹てそのふ理なき寄をなはして撰に称へるを是に於てその本わたらんすをおよふて学世ひて俳諧の学術にあつけ投世すて是をなしくたるをといさし先至称し之仍て是倍を伊賀ふ傳るらふ孫これを守らん

蕉門正風師説録

附合之事

亭路の句ハ景曲にし事姿あるかよさありて心かちに妙なきハ彼をもむつかしけれと表ふり座まゝにあしけれは是ハ尋常の俳諧といふなり事によりて發る句此論の外に至るもの句出来んも志るへからす此出来事あるを是に随ひ座し猿蓑集を浪常の席にある景也あるの句ハ亭路に冬籠りて冬の日なるを有心の

事なりと此翁の業を困て
蕉門よりいよく寛く事
を禁しられて様中に頭ら
ずとかや言きかて哉
然是よりて法式とある所と
翁の所謂をもて俳諧ひし
古式のことを余いふる翁の法を
見て俳諧あるをもて斯への則
とは俳諧俳に縦を法として
其程をもて推すべし一俳万
俳と變は学者此廣大なるを
知るへし

五縦の名目
翁曰縦はひつくり附人附
うち添ひ遠付地留りこれか
うの事は未翁にあらず皮俗
俳孝能にられて置なし 渦

發句より起りたれとも全体重きを雜とす俳諧
集を見て其旨をしるへし
縦の事連歌に五縦の法あれとも不取之
先師曰脇に五縦といふは宗祇の比より定まる
事なれとも常滴は發句のうつりに定て能を
顕し定る体あれとも古く家ありとすへし雜れ
し之世間此説をしらすの病なるかあるは五
縦をもて数とす須初心の手かゝりとなす階梯
ともなるへけれとも予是等の旨をしるは
早く先師の義にしたかふへし猶是ともかく

且これとまた能と論すへし
發句縦に翁の法一大事
の秘事ありて世に周ぬ
にかまく發句縦は一是
のを説きして父母あり此
二句合体して一句の句
を生ずる故に句縦とも
なるとも所謂あれは附句
其二句一体之故に身の
平句と違ひある句の余光を
かけて第三へうつる法寸
毛もふの勝らぬやうに縦
をいひきりて法へたとへは
やうにするか肝要なり
縦は字数と定まるの意
味にあらずして字留り
するは自然に縦の勝
らぬやうに調ふ為なり
故に手に義省とやうや

いふのことゝ初心の手かゝりとなし發句のなと
にようるものなれともあるへし先いひとさけの
ともわかるの有る有へ是に有るを
本句出来たらは體の句ゝ開の句より又有ん無
心句の大中小品ありて時節とて是を分
れましく發句をしならしけれきの縦人倫
人事なるは縦にすへきなし嫌ふ或は大に或は
中に小に姿情意味を發句の模様によるを
よしとす

人倫人事文

いふや初心のうち語り
芭蕉翁しかし句を案じ
の住ありかくいふ上にて
一偏翁後人の大事なり
妙旨作に語きを用ゐ世
の諺に翁の極秘門人に
もあら人猶に四字の上を
さし家の妙旨に事らず
事安楽なれども人あり
来く古付句の極秘語
語んぬ我を背くも万代に
伝りて語り事あらんには志
ありもかく霧に夜に来り

粗句あつしゝの身を笠一宿に帙き哉
掌そやこぼしろ笠の山茶花
南の色に梅とさそふや茶乃餅
翁手なれし　蝶鳥の咒
景曲　第五　余色　庄大
梅ろ生手於川と日の出ろ山語蘇
さあろくに雛子の降し宮へ
秋於雲尾上の杉にも風ちなり
都人れく一羽流るゝ雁
同中

灰汁桶の雫やみけり
きりくす
油うきりて書案すれは
此附付のもくらき一句
の調練翁の自讃の振と
かやまた句に人なし振に人
事を付出して其句に人
を拭きさろ附也句作の
あし至簡りの工合振句
を作るの同意とすへし
但人なきま句に人を附
出し人有る其句に人
なき振を付出る事切要
の手裏なる又句の眼なそ
味ふへし

鶯於羽も敝ぬも川に座花
一吹風の木葉をつまま添
曙花や苗代時於角大納
明ても霧む壁前の貞
同小
宇治さし於鮒うよりの水
梅のうちの不まきり於卯
如く如石まさいふ蒜の聲
も秋夫も古語に在り松虫
人倫人情人事景曲にとゝまり大中小兄同

猥句ハ強ち挨拶なくして
すむ句と覚ゆべし然
先生一くさしたなれど
此句の注を入れる如く
になる也

猥ならぬ時ハ発句にも様々に叶ふやうに其ほか
習ありて家にも一二を乗る此外ほとりて集く
翁の作意を見るべし

挨拶の句
粟をまち藤扇り 榊を花車

古人かやうの夜乃あらし

宿かりきん西行ならば猿の蓑

まさ銭と茶ふ風の破笠

茶ちりかる炊きよ百年の手作麦

田植とともに旅乃朝起

名所国名所名等の発句ハ猥りならぬ一条

かやうの格を正しくす
る事ハ名歸のまんかい
の時もかりそめ平常行
学作の俳諧にハ略式な
る扱いかやうにもよき
し

但名号の時ハ法の通
正しくするべく変格あ
るべからず

名号の俳諧する其変に
よりて調ニ可忌事古法
ニ数く有て翁ハ一向是
を破却して用ひ給もぬ
事なりいひならずたに
あらば取捨ありて可忌事
ハ戒め給へり礼ニ当たる
べく是も名中にも俗情
なるハ捨給ひしと見ゆ

名の所を数寸法あり

志るましくて見るもや美濃の田植唄

笠ありさん不破の五月雨

古法かくのごとしといへども数ある中にも慮し
翁も捨おかるゝなり

神納法楽祝言銭茶追悼追善懐旧都て
名歸の俳諧ハ名の上よりて発句ニ顕して宜
しきなり 但地縁にて句作るなり

手向 茶葉留

来月や湖のつくし 並 蕉ち

あまたにかゝりて候へ手は
脇の手に葉留の事喜旨
の方に臣書を用ゆるべし
爰に略す

挨拶はさんかくのごとし由
此あり俳諧には甚だしき
事好て尤も屆し

冬の部は続あそびなりけり
發句にてに葉留なれども脇韻字留にするをいふ
古法也大かた如是なりし手法をもつてなせり
うちあるへては平句にもよろしき事 なり
なくてにを葉留ともを以て附るれ けり
んに常にありかゝりの句ありても脇をてに葉
留にせるといふにあらば先ず懐紙の表留乃
見えるしからぬはめにせるの又曰脇のてに葉
留は全体第体之挨拶なとハかなる脇をぬっ
よ紀あり格外に再せるてにを葉留の發句

脇句手に葉留の時は第
三韻字留にあるといふ
古法あり
翁曰第三の韻字留は用
体のあるものにて五文字
のうちまで留るなり貞室
跡の序と留より此選の
たゞめし候是にて格さるべし

挨拶に出来ることも脇手に格にしてあるべからず
なけれ共君手に葉留に句脇の對を發句に第三
韻字なく留ましといへども懐紙面の並を始め
のもの後はなり傳授とするなれども何も
翁の許し一なき

第三の事

第三は變化といひ次一轉といふ所變化と
心得て強く自然をうしなふ事の次當流乃
集々を見て味ふべし 古法に格形大山の法あ
り當流なるを是を用ひ候すみのてに葉を略くと

又除字にて発句とてのく字にて留る事ありたとへはきよめてのと留るも清発句也
韻字留に二法あり古法に一種蕉門にて起りたる例一種冬の日の榎檜山家の体を
木葉降
是ハ古法の字留の法にあらず蕉門にての例也外にもあるべし口伝
前回もある一句の事なりと云へハ馬に角もなしといふ未句のもなし又牛に角もなしと一轄あらず
第三のもなしなり

いふ事なりむかしより大切の事としるし今の大方の人もしれる事なりこゝにて手爾葉をぬく時は先第三の位をうしなふの初心の階梯也古みの手爾葉といふハ上五七の間下七五間の手爾葉なりすべて此手爾葉とハやはり此上略五七五の間の体にて字といふての留ハいはれても留には手尼し着きし合時ハもあるべしなれやらんにはなくして留るべし但此留の未句にて留の第三然ばかりしては外に要ふ致之氣韻といふ事ありいふべし拝要也

未句にて人倫ある時第三極て景曲を付るといふ事格式の中にはいへども一句は人のうへ及景曲を続くともに一轄きらひしある時ハ害なしたゞ軽を本にするを旨とするなりかく大旨を述るなり
空おもれりつるを定む
但書外

又曰第三は前二句と違ひて二句の間より一物を出して手爾葉しつけぬものと云説あり所謂移句にて位よも微意あり但第三に限り附るといひもあらぬの第三を被るといふは強て付るにもあらねどもあらず
又曰発句人倫人事あらば猶もあり天時季色あり発句に景曲あらば第三ハ人情にて作るべし未句猶大ならば八第三中より小余に見て致へ移して三句ひらきたる縁拍なり
春の季頃に第三まで花出来ることも

いはてさへし涌の
汐境
さまゞの魚のかはるも
年ふる　翁
水鶏啼と人のいへばや
さや泊り
苗の雫を舟へあけ
出む
野風にむすぶ合羽を
吹さそ
かく景色斗も人情斗も
つきたる例多しと知べく
手摺のものゆかしかるべき之
星月夜の月を持たる変
化
春と秋集 名残の表
うき世しんでかへる中の戸
の岬籠
終に月を付たるの星月夜 翁

若しは素其も植物にて出来かふるといふ
説もなく、ても承るべしかと云場のよ
ろしきにゐるべし
然るに第三ハ月を出す之星月夜ハ月に
あらず、おなじ句の句作りひ大切の心得
あり三月尽九月尽ハいはゆる事にして九
月尽ハ須ても月を出すべし第三に月を出
さ季候して定る須習あるなり九月尽
の句立ぬうちに紀あり 直旨に妄し
第三物草句物と云を取物に物好ある事之と

次谷の梟と附け名残
の裏引返し冬龍と付
冬三句にわたして冬月
とあらば異なる例なり
四句目八第三に打添ふ
をもして付起るハ悪
し狸をおこしけれの付方を
起し折る句作に作れと
も第三によく〳〵あらひ
て一句らしく作る波に
折る事あらし妙なり

翁ハ中さかしき之位に至りされも其物去れ
も不足四句目ハ軽く去らしといふ事昔より
の教え、さるをも心得遠てや四句去るゆかれ覚
えるハ誤なり蕉門の説ハ四句目を変化の
あしめとし大切の場也去るとくとあるに作の
去りて後へあり此格手やとめに去る気の宜し
なるもいへ里の旨をもちて何をかこれ　所
になるん猿蓑集に狸を打ちし篠張の弓といふ
句も折り本句景曲の時第三人事の句大
にて出来申し四句目に去るの軽なれも第三

師

一季の表にせぬといふ法あり

はかり能きの中にふなるまりかゝる時は大方
人事を附る之
五句目六句目可然者多し然れども定ぬ中
にと心得へし八句表の時は此二句無役の場
に仕る所なり中にもそれを表なしぬ句
ね出来るものなり
七句目月を出す時無論なし秋の発句の時は
変は他の季の句を出す事し歌仙は一季にて
もそれしらは名号の俳諧は大かた法によ
ありさよろしれ之

修行のはじめより格捨
まくるにはあらず翁曰
格は守るべし格に入て
格外に逃べしと之格より修
行して後格外の格に行る
事を発明すべし守るは
かたく破るは守しきやすく
れにあるといふ時は放逸に
落て道の則を失ふにあ
る未練の華あるを思ひ
きんもあるし

此先の尋常の俳諧等体にして変格は時に
随て出来る之名号の俳諧は真なり其
上も行きくし先にその格正しき之行無其
次なり等は変格自由体之此故に翁の集及云
捨のもいふには変格多し集といへども名
号の俳諧にあらは只自由体にて格を出す
此位に至りされも縛されて縦横なる事何ぞ
も後師家たるもいさゝかも自縛なは家に居
しみ人なも蕉門にて発句も京ありて等体
には放逸も西なき体も何まさあり翁の旨と

師

さしわしは發句の学体なり
おもしの句や四句めやうに覚るハ誤なり
右表の折端にいさゝか心をひくもあるべし
表丹に至て八ツ巻面の折端毎に出たる句の附
事ハ後の句附出しへも力あるゆへ却て巻中
悪くなる然ともおもしろくしてよふ事なれハ
しかあらハ次へてあるまてなり抑附
合に一句重[出]川中にてひとり次おもむれ
孫る中にある店の手がゝりて楽て面白ある事
の出来るものゆへ是を句のきさひといふなり

説に曰初表の初ニ恋を嫌ひ又二句目までハ表の句価値称揃て附るなといふ事ハ其名ハ本式十句表を異しく百韻の八句表と称さしうし起りしこ本式十句のうち八句を表に移し余りの二句を裏へおかへしを右表の内二句ハ裏の内へ来てあるなあるを恋の左右裏なるハ歌仙又百韻表八句を略して六句表とし二句をうちへ送るなれ百韻と同義なるゆへ前を是をいはれ事ずとて用ひ称ゆかうし由是恋門はれあるまじきとらハ他ゝならむ是を申由の之

裏ヘうつりて恋を附る事待兼恋とて世に称へ
至待兼恋と名付て制す是ハ何事もなく手段
を間ちかひしと律する事し祝詞なとの俳諧
に雑の句先恋ひ出さんよりもあるかまゝへし
句ひの恋揚句まてハ恋の句をする事なし
うしろかへ川て祝儀なりし前の中にあれしに
てある事し新句ハ見しハ言捨の俳諧に要なし
の恨を伯母の書考しく前の句ありされと
席の字遍是を制さ之背く然うしハ是ハ面
にきさる物に裏へうつり二句まてむすうし制し

附字ニ段あるといふ段
を知るといふ翁の払し〈へ
あれと當時の人是を志さ
るものは誰一書成るか
如し翁の口三四句を発
句より一書を文章と段に
立段とる分る事よいふ段
前の事へ一巻へる文章な
るの故に段落を見へた程を
うし段落よきの味のる人
ふるよりて末句一句のる人に
ていふ時を思物之地切な
きとれハ猫事に段落所
て附へるし是一巻の首尾
をなすの其一篇に有
但ニ段をとる事口傳

傳るや當流ニさて手沙汰なし
表より三四句程初表のうちに事もなく其
専しまといふ説も百韻或ハ席ふりの俳諧の
心得とうし其体ハ是ニかゝる へうしハ表
よりのはこひにもあるるなるハ大かた表ニ
つりハ起請なり 表ハ句数ニいふ起請ニ あれハ附方のこへの起請之 力を持
さんれめなり表の折もしれ不ふとやきうれ
其深衣之面に縫二句目を起請に旋して志うと
附る之三四句数ニむ川うし捌のもしらんとすら
なり此三句目大事之風景なとにて逃附にいし

らひるとあれハ俳諧骨折事ハいらぬ付ニ出
所ハむ川も逃句もるゝやふまをるゝしまの三句
目くの変化を学ひとなる事之其三句の別ゝ
手ニ入れハ千句万句も自在之といへり俳諧の
稽古ハ付ある意味と三句の別との二句此中
ニ子ら萬葉の体出來る之四句五句或ハ是見なと
し付ありひハ運ひの換ひ之趣ある裏移の三句
目も捌ハ又付たるハ四句目ハ出んとなる之
更ニ景色ニ移りうるハ半延の句とて半年用
のあ中紫をのしらひこ句を作る五句の人ハ

来付の説話を見るに人
の人三句をつゞけ所にいまゝ
人情附けはなくきるに伸ぶ
遊句を付けて所せり在
に力をつくさへし場所来
らはしても景共の附の
まく一巻にならしむるを
歳を経るにとるなく

て人情を抜く氣色言語にて付延さんとなしたる
かくいへとも格式の中にて覚にかゝはれ
偏屈に成り〳〵て附合は前句よりのこと
ひぬより物かはれかくんを得しん人は變作自
在なるにて人事を五句もを嫌へく
風景の句は二句に至へからし併景情の句多く
續けて其中力をうしなはるなり 仍
く景情の景曲二句も續くは三句目は恋付起
して人情を出さん〳〵し變に人事人情を来し
て附けることに上手の業なり初心のつゝしむへし 人情

さらのいくえゆるのこ
いかなれも人情をさむる
事をかく怨るはや三句
四句にも人情まとまる
に推ていはとひ一句人情
のことに附ることも害なき
事也其中ゝ前順の人
情をいて去るへきこと
仍て人情を付ることの然
のあ一にならへき之去來も
既に此事を論せり

之四句も續けはさ數の之をも〳〵ま所にて
人を扶と抱ち忽ちにおぬ事て一巻の癖となる
遊る居れ席は自然と出來るゝ是を思ふる亦
功者の眼なりては難しき事案して手紙
ひらけさる所は何句にても附ることは當流の
力なり是も自然の境なりあることを世間の説話
は三四句も人のこと人を續けはにたくさしとて
必無理に遊句を附るなりいはぬことにれとも
無しておひもてゆく所大方能説聞し調子
なり附ケといふ場と地にてさらに境のまとめ

なしかくてハ一巻の眼と見るへき所なくカ
なきなり轉變不變の變今日の上に當て了
簡も定經事なしといふ定あらんや付座記經
に若句の附けよくと来るなり道座も場も亦
其心得之事定り其をもみな自然なり
伸句といふは縮る句に對していふ名なり縮
句ハ力を作して付心も立當て付詰るなり伸
句ハ逸て付伸るめぐるべく思ひ切さる死狂見
よとまて付ちるめてもるに見明月の彭湖
水ハ秋の比良の初景と二句附伸しある風景

之もいたれ共是末の二句ハ其餘六句とは事
緩中急に附来れも死ぬ故ひ見よまで事
其で外のれと援座ハ場に至りその見ば汁
なくして又その事を附責る時ハ定理になる故
或ハ添へ其ら纏かして或ハ重て付て贊嘲弄
なりて寒料素羅なしに六句ともに表裏皆援
座ハ場を逸さば好まざる故此二句の伸句は
またば快然として一入菜合などくるしく見
伸る之深川の初語干嵐雪の端に附句をお
かくと料理の甘し辛しともく苦く物によるま

猿蓑の表に
此筋ハ銀も見しらず
不自由さよといふ句体は
あつかひに作りたる句なり
然共其あつかひある一句
まで見ゆるまじの取合不思
義に珍らしく見事也

少し鈍きも極て鈍にあらば悪きとても猶何
しからば頃といへど此論よく当れども珍し
き句の縮めたるも猶よろしく候さまでにも
なく尋常の伸句の中にあるをこそかへても
へきる附却て巻面栄えて奇麗に風味よ
ろしく味なる物なりされよりも珍らしの
き句しきも何しかるとも志深かるべし
若き句を伸句迦句と同じやうに覚ゆる輩多し
誤なり伸句と覚ゆるはあれども其句に数多
なし是は殊外に附つけかたる己記又奇しかるべし

及席に至り生る時は安くと句作りして有
場の恵りをよく取り句を投出して先は
殊の外工夫ありしなり冬の日集のさも工夫
ある中の中に

藤の実つたふ雫深川の里

と云句見り左右の集にも粉此ありしなり
炭俵になく深川集にも猶見へし前後の俳諧
をこ四句見えまして心伸句むつかしれたる満て
附情る場なし故にや其句をかし全体おく
よりはをひ力を費さず弱く調子に緩急中

なく常に平地を歩くがごとくなる意にハや里句
あへた場あし　実り来る所なた故なり　西瓜
きりて梨子喰ふたつたのおもく　鍔りとに
切込如く大木を倒せるごとく　あるのをし入を
味ひありて　更氣韻句格にうつ里布ともほ
泪となるも自然の意象自得あふし　附句を
案じ上手ふあるはくりにうて足得ぬるほ
更筆かけるふのかし
景色と風情との句を図ふにわかへにくきる
是も誤あり　景色ハ附きぬたる縁の詩筆
をさ適あ場の外にあり風情ハ附あるくもちま
も句ふ人を出さあして人の上を閲る附句にて
附あへくる二句の間に更人を住居すと見ゆ
ぶし之
木つれある去年の様葉のあさまく
寒巌を山雅範の中にうつ里
是あの類之伸句なり　去句論景色とハ大ふ
あ違あり是ハ風情の句といふ之景色あき
一筋ふあた気のなきさき原
薄雲の上ふ霰のあるくと

古説に附句ハ一巻連の
糸の通りたるごとくなし
以て数あり翁素より是を
捨給ずされど古の俳諧を

是なり然用る場も句作ハ大に異なしとすべし
捨句といふハ座興句とも又別なり是ハ俳諧の
會など起手句に疑き中の時の心得之膽ふ
まじけれも各能ふ句せんと下心に思ふ故に
席沈て去嫌り出し些け不安然を捨
て捨句なく席の気を引立るなり今少し
と思ふところも自己を捨てまるゝ容易に
席ふりの氣変なり
巻中序中急の事是古より教る所なり
其中に亦緩急中の調るゝ事之此事は

連歌とひらし詞のくくの
編之翁の道ハ詞のあらたを
とらぬところの作法なれ
ハ附合も是によるらし連歌
および古のなさけハ詞の上
のこまれハ於句の調よき
をてつけるゝ翁のあかしハお
句のあたらにて附たり然るに
あらの附之故に古俳ハ蓮
の糸詞の上を貫通し翁
の作法ハ心裏をつくしぬれ
座守之是をなすの術ハひ
き句ひきおり此三つにて蓮
の糸をみちひき通すされ
ハ一句も此三つの内にあれ
にあり無通されして連句
一巻の病となる之但此事を
よりあれど一句も附さる
句とてハあるべくもなし

先師も善しと沙汰に及ぶ程に持つ大事
なり初心の華か中しの事に頓着せれも句作端
より却て修行のさまりとなる故なり
句毎に風流と風情とを失ふ為し風流是
人に依り風情ハ姿にあり風流なきハ俗に落
風情なけれハ志浮りあく句ややなり句作利口
是なるハいやしくいひつめたるハ附座をまた
ひなし但此風情といふハ初より風情の句と
稱するものに別なりされバ何の句にもあれ一句く
のよ趣あひをいふ之是を先に附る句く末乃切

師

しめより終りまでたゞ
淀なくと附るのみハあら
ず先生身三を立ての後ハ
始末地の付といふを下
心にしてそう井にも叶
を場すりて一句に一句
の附或ハ付べき場或ハ
附きむべき場といふあり
あれど一巻一折のもやうと
いふ是此又も申るに順逆
表裏の口習ありて場所
折の發に趣して起り來
るもの之翁の清撰の巻て
を深く味ひ見るを大事
ハ考ふるに阿るべし一毫
の首尾といふもありて是
又その首尾にかゝるものひ
とつ之
とろらしまでハ詩をしるひ
來にあるを此亦敷まてハ和歌

屑なれバたゞ人體の皮肉を去りて骸骨
を殘すしかハくつきなく賤しくおとなし
殊更俳諧ハ俗談平話をもて述るものなれ
バいとかりそめにて聞なれし吟聲もあさ
浅し此風流と風情とを含むが故に諷て拙
からバ吟じて恥る所なし此境よく心得べき
なり
さびかるみ細みさびしミ風雅の骨之句ひ
ひハ志不至風情ハ風雅の皮肉之皮肉骨も
句によりて皮肉の勝りのあり骨の勝あり

を諷して余をたのしく故
に和歌ハ思ふことひりのまゝ
俳諧も和歌の一体な
れも同しくことひりのまゝ
その諷物といふものを教ふ
るときへりけれはもて時に
いやしくも拙くあらじと
骨のまゝにて皮肉なきもの
皮肉のみにて骨なきもの
ともに病句なり所詮句
作成就の上の論なれバ
句成て三品満足なる句
なくとも迄あって益なし遠
に捨べし三つの物句こと
に備らずんバ有べからず
細みさびハ中々にむつかし
ろうし如中におきんとするも
いとくし中まれより入りて
かさねに入るべきにこそ

此旨傳に付きて見るべし作文のうへに起
鋒発鋒といふ事あり此道に古人の沙汰なし
事之先師に始りて此事あり年暦同時の
俳諧といふとも尋常のいひ捨の発と清撰の
巻とハ発句の違あり発鋒とハ句の表にあら
ずして意味深長なるもの有題鋒とハ句読
ありて句作も打聞より面白き根之先起鋒
を学ひて先に熟すべし作文も先を初学と
して発鋒のやすき辞なる所に至るべしと
いへり附句發句ともにまさりしなり先師の

師

俳諧附代を考て其来所を見るに甚尋し此事
明らかならねバ皆師に付て学ばざる輩ハ
口訣をきかざる故に是を見ることあたはず汝
大かた先達して二三年五七年も此道に
馴れたるや得たりと自ら宗匠となり附合を
何ともなき所に空論をかまへ或は　穿鑿
なりとそれに妙味ありなど何やらんむつかしく
たる事を云ちらしてどふか其風の中になる
あるひは志なきものも尤なりと人に沙汰
人も合點ゆかぬを其ふかく同士に歎あひて

新しきと其一統の俗人ありかゝる類ひ
は損害をこそなせ益なりかのもく難んやこ
なきを追て歴年へし其ひとく何ともなくし
て難を称する人は甚稀く句も亦常に新しきて
惑ふる句は先師にさへあ怖くなりけるまして
門人のかれこれをや僅くも三四句斗も人々は
附句と示せる佐句移ひゝきなどの意味は数
を尽して至されも費明なるし先催なる筋
より切瑳琢磨して幽玄なる道なり其奥の
深りなりけれど所謂玄の又玄是を此道のあり

さ満まて一朝の修行たる事必失るへしと段
玄来日来るあけくるをお星わる輩の骨折た
るも今人のまさらかしも同し様に思ひなし
兄もたらん為に腹いたくもせん為になしさる
堂の壁よくく是を思ひあきらめてあるをふ
るなれとむへさる事あり
月の句異名にあらたよろらは言腰あるるの
月は是を制して月の字出へからすと翁は
申されし名付まもよるる事し法まてお段之
百句も三十六句も風雅の句なる者をさる八

星月夜の月を狭う依
俗此は西六丁めの段
書ふ見る

月の句つらひいひやしてもあるて異名の論
かしをりなるまし
星月夜あ句ふ出る時は素秋にして他の季於
有明あるるの句を続る事あり傳授の此ういこ
秋端午 月をお不まるまめるるり故あるを
ころへて猥ふまへて後ま人ての変格を
詞もまし次ふ定りふあるかの正変格を格式
よるらは不学の謬なり月をを引よけ或は
去年しもんと流をも会釈ある席にハ其理
なくてハ失禮ある此の席は名の俳諧出に

師

に其名もかくれもあるべし實に道をあさり免
自然に師ともなりて仰がれて其種生附の運び變化
物好にして古今なき變格をも委しく記す事
是も其極限の事にして又さまざまにもあれば古来
糸桜をはじめ蕎麦かんばんなるも古傳ありといへど
免川らしき物多くあり是等をみても思ふに一ト
花の句のあり定まらず花とさへある事は句論
子細なし變格の极も雅のお子細あり花引上
る方は云ふべしかくもある場合あればあるべし
べきは桜を生け花をまづ事も秘事なり猥に

師

あらきまじ知れぬなり句作花道あり他の流
にては皆かくも数多くてせん此外にもさ
まざま傳授の秘事ありといへども須数多く傳授
とあるは大方は用なき事成極の事
或は金くらべさまざまにて是等秘花とまり
猥に申すは所を半途の人より良に珍事を求て
其手あし傳る故秘して教ることなりさまざまにて業
高位人なり共其志ましまして道に深切なる輩に
は其人によりて免許して人々之是非の人には尤て
其免ゆるして事をなすは口にも出ず輕そのこと

本越志の事
みだし野を事の
雪ち人あの毛
右定坐の一二句者水仙
此花落葉野桜木の句
ならてハ花の字植物花
の定ふさハる故に宗匠執
筆の中ちくるる之あれとも
其人身位正客なるの句
強く返すに及ぬと附
此句作の術を用由此体
を味ひて作いろ中に
もあるへしかくて次に春
句を付へし是素り前
の教なり

る人を思ひて情偶ふへし
落花ハ植物なと附ともその花をきる習之
と附とも其一句も雑にて花の植物ふかきをもみを
其句ハ真を附て正花ハ扱ふ由へに後をも
植物定式の去嫌にちる法之此扱あるといへとも
落花にあつかふ植物を出さる事双なき宗祇之
急と紫して其句を廃ちへし面に情を立て無り
ら法只貴人なとの風を植物を出し扱ふを通
し候ん事いうな然も附の用ふ扱ふをなれた
めの扱之事も前と同ハ扱て然もその花せん

事なりしかくぬ心得をあるへしいつれにても
正花正月の事をもあちら始めを風流あれ
花のある表に桜を扱ふ連歌の説之俳諧にも
七句去て花を出し越れとも歌仙にも無擬枯
いうもなくらん
花の句護句種等之の外表にせさる法なり扱
事とそり
波の定賦の花正花にあつれとも扱ふて正花
なりと先時中にれいら之実の花実の花を扱ふ
て正花にもなら不花扱 本意を雲霧を賞翫

花柑子
云にて正花なれとも
世上柑類の花と同し事
にて前遠なり是ハ柑子
の内の一種俗に花柚を
とふなり香気殊に
兄弟なるをたとへてかく
黄美の花なり花橘花
解すべからずあり
拾玉集
夫木集
南の秋は拝樹木ある人
如何にてたちはなのしき
花柑子が
是なり秋より夏によりけ料
理のかうひまるとつかるの之
柑類の花ハ季節夏之此ハ
春なり

していへる花の字あれと季を違へ申之
花紅葉と続けて正花なり雖然二季共なる
名なれとなり花句によりて季強く分る季を
定て後を附る之
花のみにて植物にあらず花の字と同前
花の字植物之
花の波水辺なり植物の花の雲は花を定とも
雲を花とも見る体あるへし句によりて分別は
浮しきの波は散て浮ぶるをいふ
花の都正花之花四正花之季ハ桜に限るなる

香は時は多くの花を手向るよりの事に似たなり
名残の花と称する故の事之句ひの花とハ花式
に揚句をひらしと付て仕口ふかなと記なり
愍の句二句目曹於之詞にて附捨て是を念之
一句にてさし引くるのあるを付て花句に心をひ
二句の間に花を含る故なり当流詞の意を
としの心の意を愍とする所なり

終

直吉傳の序詞を考ふるに前いまそかりける後越人

此書既に傳書として秘蔵かたく世に無かり
されど今画を習ふの種とも亦なるゆゑを執ん
此筆をなしてわかりよく見る事を専らにして
後起にも伝ふべし

二画の分て傳ふる所は序詞に詳なるが如し

の庫中に入しとハ思ひ
に此書にハ先師と書けハ
滅後書きいれたりと見ゆ
ならびに記事の傍にそへ
たる次第もそしりなるべ
しかして貫通せざれバ
越人の編直せるならんと
思ひ既に翁の死後に
てなれハ先師と書あると
むるなるべし稀に翁とある
もあるハ即ち記事の
まゝなるべけれバ事義に
かゝはらずれどもさもあり
ぬきたくもあらざる
べし

然して我祖父此事を越人に受て反古の裏
に書写せし古の間易志りしも極て麁なる人に
或ハ紙魚ばかり文字を失ひ垢の染に穢
を朽されたる甚しきを悲しむ仍て其の
紙魚の誤の欠字を補ひ一て監幕して是を新
写に明らかにせん欲して此二書天下普通に
傳ふ事なれバ秘画の極として秘
きまれもあるべけれバ今是を梓にして傳
へて道とたるも不朽なる志しなん事を希ふ
のみ

文政八年乙酉季夏日書

嵩岳居士

文久二壬戌年
仲夏刻成

芝飯倉五町目
萬屋忠藏梓

學者必慎所適道。道於楊墨老莊佛之學。
而欲之聖人之達道、覓宗廟百官之美富、猶航
斷港絶潢以望至於海也。故求觀聖人之
道。必自孟子始。孟乃遡孔水草一處之濫觴也。孔子之道。
至大而能無博。門弟子不能徧觀而盡識也。故學焉而
皆得其性之所近也。顏子之得心齋是也。蓋師説直
指傳録。乃杏壇灑掃弟子之所以學行之男子六經也。
乃論曰。三代既往。滔滔者焉已六經備。而往者不往。
三代以還。滔滔者有焉。愈變愈出。不觀古於六經
者無有。故王道不墜而在。揖讓禮樂之盛與商
彝周鼎。怡目而不適用之宜。取舍韓旋。為之傳繼。

縉之真儒王佐之才矣。若夫傳繼如子夏之易傳詩序。儀禮喪服。撰定論語也。天之所以不喪而化成德達財當問私淑之教也。然君子觀人無不可小人觀人無可何則世道興替。繋於人。不繋於天。故君子以觀塵奎為行拂之逆境。以為順。觀塵恥以為順。小人僥倖。以營求富貴也。且得者時也。失者順也。以失為順。君子憂患業自而武。以富貴貧賤。論禍福。非也。與其富貴而多患害。孰若貧賤而靈仍聰明焉。予樂貧困於將來。於獨活有風而不靡無風而獨搖之真儒王佐之才之觀觀耳。加韓我邦大雅蕞善之君子國也。文治洋清原頼業績

禮。聖學庸。表章之。其明哲睿合於朱子。故言志之詩。今猶古。今茲文久壬戌。友益一貫重鳩而自指師說焉剖闢屋之功。觀之文詩節膠合。益以範於滑稽道腴。司任於觀對於年陽。常不審趣隆生之兼拚十蕉餅。操紙著於藏。縣於山中。牢相縣筆腸臨絕徵。則不義之聲韻黑壯。謂為絕平趣石碼。以翔者抑。無悶真儒王佐之才哉。其句之為醜壯。儒饕自有窮著一處。無席。青說口吞司馬陝州五絡。揖下梧桐影。要衡陋屋於湯。平重衡。縱睹數行。靈異氏涙。無擇長。蓋鵝夷滑稽。復大以告。畫自盛世。人復倚賦。常為國器。任於屬事。乃翔之諧謔以新。而翔

之素便曰。人常慮危。無有臨危。車行羊腸。而作於平地者。慎於難。而忽於易也。保天下。亦如御車。雖治平。何可不慎。余網之至慎。重復如新。益網之意。金保完於直指師鋭両絲鑄之觀之網之公布謂鬱蒼於世也。於磐石九以愈藏墜癖之也矣。蒼籠之士贊不亦宜乎。一夜両狂。響音傳芭蕉。屋觸成音。皆耳驚置哉。不濡雨。而聞響。妙明靈心。圓通至上字於簣蓬之網。亦復云。遂以為敘。

皇和文久壬戌晩夏　招鶴亭主人翁遂目述

三都
發行
書肆

京都　三條通柳屋町　出雲寺文次郎
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
大坂　心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通博勞町　河内屋茂兵衛
同　日本橋通壹町目　須原屋茂兵衛
江戸　淺草茅屋二町目　須原屋伊八
同　日本橋通二町目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　下谷御成道　和泉屋吉兵衛
同　芝飯倉五町目　英文藏
萬屋忠藏板